

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成20年9月 第91号 年間購読料1,000円(1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

介護現場再生宣言

今、全国の介護現場が動揺・混乱・疲弊しています。介護職員の離職率が高く、募集しても応募がなく、稼働できない事業所も発生しています。さらに、介護士養成校も軒並み定員割れの状況であり、明るい未来が見えません。

給料が少ない、作業がきつい、非常勤が多い、等々の評判と同時に、介護に喜びや魅力を感じられない事が大きな要因なのだと思います。

人には『生きる権利』があると同時に、必ず『死ぬ運命』が待ち受けています。65歳を越えて高齢期に入ると徐々に機能が低下し、肉体的には確実に『運命』に従って『死』の準備をしています。これは高齢者施策の基本認識として世界に共通しています。

介護の現場に身を置くと、要介護期間はその運命の最終段階であり、人生を終える為の完結編である事を実感します。介護職は介護制度を担う一員として、要介護になったお年寄りが『運命としての死』を迎えるまでをお世話し、その尊い姿を見届ける役目を担っています。

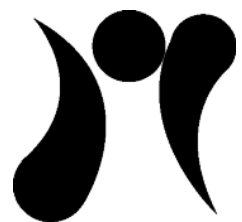
その基盤となる介護制度が今『生きる権利』を追求し、要介護にならないように、重度化しないように、と予防が重視され、介護現場には予防の効果が強く求められます。死を回避する努力が最大限に求められています。

その介護現場で、多くの介護職が疲労し離職して行きます。現場を預かる責任者の一人として、何か強力な介護現場の『再生法』を見つけなければ、と焦りにも似た想いを抱きます。

高齢者は、『生きる権利』を主張しながらも、『運命』を受け容れ、より良く『死ぬ責任』があります。65歳を越え、何年も掛けて『運命』を受け容れる準備をしてきた要介護者は、自然に安らかに人生を終える事でその責任を果たします。自然な形で迎えた最期の死顔は、殆どの方が穏やかで満足げです。その過程で経験する動揺や感動が、介護者自らの喜びを生み、思想を育み、その後の人生を支えます。其処に介護の魅力が在ります。

(次ページにつづく)

せいりょう園 渋谷 哲



(前ページのつづき)

高齢者介護は、『死ぬ運命』に寄り添い、『生きる権利』を支えながら、その『人生を終える場』で、安らかな死顔に涙し満足感を味わう処が基本です。

人生の最終章・完結編で主役を引き立てる脇役として、介護職はなくてはならぬ存在です。超高齢社会は、『超多死』の社会でもあり、安らかな最期を演出する介護職の出番が益々増えて行きます。超高齢社会では、『死ぬ運命』に寄り添う介護職と介護現場の存在が、病院や家庭や地域にとって、とても重要な意味を持ちます。

せいりょう園は、ご利用者の『人生を終える場』に寄り添う介護現場であり続ける事を宣言し、喜びと魅力に満ちた介護現場でありたいと願います。

ケアハウス等空き情報 <平成20年9月10日現在>

<ケアハウス>

- | | | | |
|-------------|-------------|------------|-------------|
| ・めぐみ苑 | : 1 人部屋 2 室 | ・香楽園 | : 2 人部屋 1 室 |
| ・シスナブ御津 | : 1 人部屋 1 室 | ・青山苑 | : 1 人部屋 2 室 |
| ・アゼリア | : 2 人部屋 1 室 | | : 2 人部屋 1 室 |
| ・キャッシル真和 | : 1 人部屋 1 室 | ・保月の郷 | : 2 人部屋 1 室 |
| ・ウェルソング はりま | : 2 人部屋 1 室 | ・恵泉 | : 若干 |
| ・せいりょう園 | : 1 人部屋 2 室 | ・第二ケアハウス恵泉 | : 若干 |

<バリアフリーマンション>

- ・リバティかこがわ 1 室

[問合せ先]せいりょう園介護相談室 (079)421-7156/(079)424-3433

アクティビティの紹介

~シリーズ2~ 『お花の日』



岩本 トヨ子 様

☆長く華道に親しんでおられます。お花の流派等全く解らない職員達…勉強させて頂いております。短い時間で素敵な作品が出来上がり、毎回びっくりしています。



長永 かつ子 様

☆水彩画・陶芸・お花と幅広く取り組まれています。作業はお花にハサミを入れる部分のみ職員がお手伝いさせて頂いております。“デイフロアがさびしい”と作品を飾って下さいます。

毎月第2木曜日午後、デイサービスフロアにてお花を楽しんでいます



加古川市地域包括支援センターの民間委託への対応について

地域包括支援センターは、行政が従来行ってきた老人保健事業と、社会福祉協議会が行ってきた地域福祉活動と、民間法人が委託を受けて担ってきた在宅介護支援センター運営事業を、一体的・効率的に行う事を目的に創設されました。民間委託に当たっては、行政や社協の担う公平・中立性の確保と、民間事業者の持つ専門性・即応性の活用、介護保険事業の公正な市場環境の確保、以上3点が最も重要な課題です。

1 公正な市場環境の確保

要支援者への介護予防ケアマネジメントを専属的に実施する地域包括支援センターを、介護保険事業者の一部業者に委託する事は、公正な市場環境を破壊する恐れがあり、望ましくないと考えます。

原則的には、介護保険事業を実施しない法人に限るべきであり、少なくとも、指定居宅介護支援事業を実施しない法人に限定するべき、と考えます。保険者と一部事業者で公正な市場環境を破壊するような委託関係は慎むべきです。

2 公平・中立性の確保

地域包括支援センターの活動には、地域社会の福祉的な許容量を拡大する働きかけが、最も大きな比重を占めています。収益目的の事業の主体ではなく、全市的な住民ネットワークの構築に取り組んで来られた社会福祉協議会の、組織を挙げた地域への取り組みが、地域包括支援センターの運営には不可欠であり、運営主体として、社協が最適と考えます。

3 民間事業の専門性の活用

加古川市においては、12中学校区に12の地域支援センターが現に稼動して一定の評価を得ていますが、母体事業との関係性についての疑義も聞く処です。

12地域支援センターについてはブランチとして、市民センターの活用など設置場所にも工夫して公平性を確保し、民間事業で培った専門性と即応性を活用して、身近な相談機関の役割を担う工夫を講ずるべき、と考えます。

以上の3点を踏まえ、1 或いは2の条件が整った場合には、3のブランチとしての協力を考慮したいと考えます。

介護専門職は、要介護になった人の『最期を迎える暮らし』に接する過程で、専門的な資質を蓄え、向上への経験を積みます。介護事業運営法人として、予防重視型システムの中核機関とは適度な距離を保ち、『最期』に寄り添う介護に専心する事が事業の本分であり、社会的責務だと考えています。

介護現場発信情報

～かけがえのない^{ひととき}一刻を～



ユニット型特養はこの9月で1周年を迎えました

ユニットより

介護職 谷川 正樹



自分は「余生」という言葉があまり好きではありません。

「余生」とは、「これから先の余った人生」と書きます。一生懸命に働き、家庭を守り、その先にある人生が、まるであってもなくても、どちらでもいいような余り残った人生であるというのは、あまりにも辛いものがあります。

自分はせいりょう園の職員となって、5年目をむかえました。そして昨年9月より、新しく立ち上がったユニット型特養で働いています。ユニット型特養とは、入居者の方の自立生活を保障する個室と、共有スペースである食堂ホールからなる空間を1ユニットとして、それらの空間で入居者の方は自由に生活されています。入居者の方は、認知症の方、身体が不自由な方とさまざまです。

ユニット型の特養で働き1年が経ちました。その間に、自分が長い間受け入れることが難しかった「ヨセイ」という言葉に、また違ったとらえかたがあるのではないだろうか。最近、そう思うようになりました。

「歩かんとあかん。人間、歩かんと身体が動かへんようになる」と自由な時間に屋外に散歩に行かれる方がいます。自分達は何もしません。遠くからは見守りますが、後はすべて本人にお任せしています。

「近くのパン屋に、お茶を飲みに行こう」と誘いを受けることがあります。自分達は仕事が一区切りしていれば、一緒にパン屋に行き、コーヒーを飲んだりしながら、ふだん話題にしないような話をします。

「何か手伝うことはないの」と尋ねてこられる方がいます。自分達は「お願いします」と洗濯物干し、洗濯物たたみなどの仕事をお願いします。

家族と日帰りの旅行に行かれた入居者の方もいます。自分達は、朝「行ってらっしゃい」と玄関から見送り、夕方「おかえりなさい」と帰ってこられるのを迎えました。

自分が感じたことは、少なくとも自分が日々接している入居者の方は、散歩に行き、買い物に行き、店にお茶を飲みに行き、仕事をし、家族と外出し、毎日を自由に生活していられるということです。入居者の方自身が、やりたいと思ったこと、楽しいと思ったこと、満足することを自分自身で行なっておられます。その時の姿は生き生きとされています。それは、自分が望んだことを実現できているからだと思います。

ユニット型特養での入居者の方の生活は、入居者の方の人生そのものです。そして、最期には「死」がやってきます。しかし、いつ訪れるとも分からない最期のことのみを考えて毎日を暮らすことは辛いです。毎日をふさぎこんだ顔で過ごすことほど辛いことはありません。今、毎日を暮らしているこのユニット型特養を、最期の時を待つ場所としてのみ考えて欲しくはありません。ユニット型特養は、毎日を生きる場所です。入居者の方は毎日を一生懸命生きています。今の瞬間を力一杯生きています。もっともっと、入居者の方自身のやりたいと思ったこと、楽しいと思ったこと、満足することを行なって欲しいです。その為に、自分達の助けが必要であるならば、助けますし、協力します。自分は、入居者の方々の生き生きとした姿を、いつまでも見ていたいのです。

「ヨセイ」とは、「これから先の余った人生」ではありません。これから先も、まだまだ続いていきます。第2・第3の人生が広がっています。自分はユニット型特養の入居者の方々から、「人生もうひと花、咲かせることができた」という言葉を聞きたいです。その言葉を聞きたいが為にその言葉を聞くことができる日を楽しみにしながら、毎日入居者の方と接しています。自分はこのから「ヨセイ」という言葉を「与生」と考えていきたいです。自分の持っているいろいろなものを周りに与え、そして自分もいろいろなものを周りから受け取り、お互いが支えあって生きていく。一生懸命に働いて、家庭を守り、その先にある人生が、より大切な時間となるように、より実りあるものとなるようにこの仕事に励んでいきたいです。



ユニット型特養でのやりがい

介護職 川崎 賢一



ユニット型特養（以降ユニット型）に移って1年が経とうとしています。最初の頃を思い出すと、毎日初めてのことばかりで不安や焦りと格闘していたことを思い出します。

そこには従来型特養(以降従来型)では得ることのできなかつたものがありました。

その1つがお年寄りを主役とした介護です。いままでは、業務を円滑にこなすその中で介護をさせてもらう為、どうしても1人1人と関わる時間が少なく、大人数でもあり、業務を優先させていました。

しかし、ユニット型に移り1つのユニットあたり10人となり、数的負担が減ったことで、よりお年寄りと接する時間が増え、お年寄りの生活スタイルを理解したうえでその方にあった援助を選択できていると思います。最初は、利用者の方も慣れない環境からか前の方が良かったといわれていましたが、今では生き生きとした表情を目にする機会が増えているように思います。

次にお年寄りの家族との交流です。従来型では面会に来られる家族の方は少なく、家族の方と接することは、あまりありませんでした。

ユニット型になると、ほぼ毎日のように面会に家族の方が来られます。その交流により、お年寄りの状態説明だけでなく、家族の方が話して下さる中から

その方本来の生活スタイルに近づけられるヒントが隠されていたり、緊急時円滑に対応できる基となり得るからです。

家族との交流で私自身うれしかったことがありました。それは、毎年恒例の暑中見舞いを書いたことから始まりました。その方は Y さんという女性の方で、従来型の時からよく面会に来られている方でしたが、あまり話す機会はありませんでした。ユニットに移られてからは、状態説明等で話すことができてきました。そんなある日、「暑中見舞いを書いてくれたの、あなたね？」と尋ねられ、一瞬なにか間違ったことを書いてしまったのではと自問自答している中、その方は続けて「本当によくおばあちゃんのこと分かってよかったわ！ありがとう！！これから何でも言うてくださいね。」といわれました。私自身想像もつかなかった答えが返ってきた為一瞬戸惑いましたが、その後暑中見舞いを書いて良かったという喜びと、家族の方に信頼してもらえたという喜びを得ることができました。

私自身まだまだ未熟な部分があり、もっとお年寄りやその家族の方に信頼される介護士になれるよう努力していきたいと、今回の件を通じてその思いがより強くなりました。



また、今現在私はユニットに於ける造園計画をたちあげており、お年寄りやその家族、そして近隣の住人の方、そして我々職員が協力してユニットと言う場所が気持ちの良い空間（癒しの空間）になるよう努力しています。植物には、癒しの効果があることは皆さんご存知かと思いますが、園芸作業にはリハビリの効果もあり、認知症の緩和や抑制にもつながります。今は、そこまでできる余裕はないですが、将来的に実現したい目標です。

現在活動する人数が少なく、日々の管理で手一杯な為、ご協力お願いいたします。

介護職 北辰 力



私がせいりょう園で働き始めて3年が経とうとしています。入社した当時は不安と焦りから仕事でミスが続きこの仕事を続けていけるのかという葛藤にかられました。従来型の特養で勤務していた頃は、毎日不安を抱え、ミスを恐れながら業務についていました。仕事の忙しさに追われ自分にゆとりが持てず、利用者個々の状態があまり把握出来ていなかったように思います。

ところが転機が訪れました。入社2年目の9月にユニット型特養への勤務が決まったのです。ユニットになり、全て一から創めるということで不安と期待で

いっぱいでした。ユニット型では、不安や疑問を聞きやすい環境になり自分自身ユニット勤務になって良かったと思います。ユニットで仕事をするようになり最初はユニットの端から端に行くだけで足がパンパンに浮腫み、家に帰り横になるとすぐに眠ってしまうほど疲れていましたが、徐々に仕事をこなしていくにつれ心地よい疲れへと変わっていきました。今では仕事にとってもやりがいを感じ、毎日の仕事が楽しく思えるようになりました。

従来型とは違い利用者の方の居室が個室になったということもあり、どこまで関わっていいのかという不安があり、悩むことの連続でした。また家族の方々との関わりも増え、これを大切にしていけないといけないと思いました。

従来型ではあまり行えていなかった利用者の方々に季節を感じてもらえるような行事、桜の木の下でのお花見、天気の良い日は外で食事を食べる、春にイカナゴのくぎ煮を炊く等、行っていけるようになったことに対し、利用者の方も大変喜ばれており、私自身とてもやりがいを感じるようになりました。これからも利用者の方に季節を感じてもらえるいろいろな企画を考えていきたいと思います。

個室になり、利用者の方、家族の方がより身近になったので今以上に信頼関係を築いていかなければと感じ、さらに頑張っていきたいと思います。



*** せいよう園 9月 の行事 ***

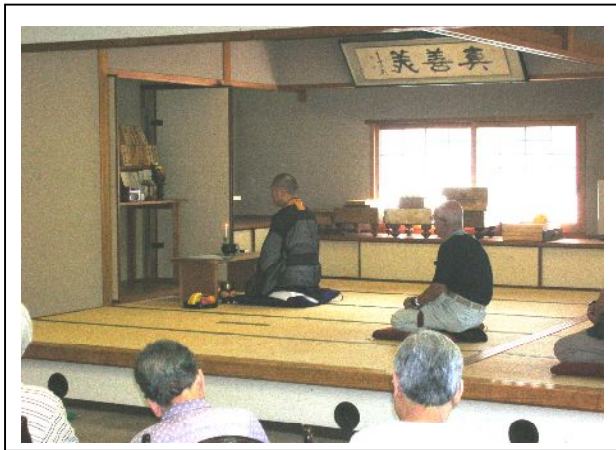
- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 9月 5日(金) ひよひ手芸教室 | 9月 19日(金) ひよひ手芸教室 |
| 9月 6日(土) 園長との懇談 | 9月 20日(土) マントリンギター演奏会 |
| 9月 8日(月) 仏教講話 | 9月 22日(月) 理容の日 |
| 9月 12日(金) 昼食会(すき焼き) | 9月 23日(火) 秋分の日(おはぎ) |
| 9月 15日(月) 敬老の日(ばら寿司) | 9月 24日(水) 郷土料理の日(鯛めし) |
| 美容の日 | 9月 26日(金) 介護者の集い |
| 9月 18日(木) 敬老会 | ~テーマ こんな手口にご用心!~ |

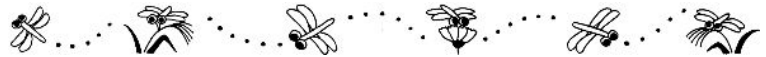
8月の行事より



8月13日~お盆の法要~

8月28日~尺八演奏会~





今回の仏教講話は七夕様の7月7日。尾上町養田にある浄土宗西山派法音寺、藤井ご住職に来て頂いた。ご住職は75歳の誕生日を迎えられ「私も後期高齢者の仲間入りです。何かすっきりしない気にもなりますな。昔は正月が来ると歳を取ったものでこんな句があります。

“正月や 冥土のたびへの一里塚 うれしくもあり うれしくもなし”

歳を取ると言うことは嫌なことですが、これだけは必ずやって来ます。」

ここで「生老病死」について話される。「今では誰もが知ってるこの概念も、お釈迦様の時代には未だ理解されていなかったのです。19歳で結婚し、子供も持たれたお釈迦様は29歳で四苦(生老病死)を克服する為出家された。6年間の難行苦行の結果『これは昔から決まったことなんだ』と悟られた。しかし、暫くこの悟りを他人に説くことに躊躇された。その内、悟りを開き穏やかな顔をされているお釈迦様に周りの人が何ゆえかと再三問い質したので、遂に意を決して悟りの内容を一緒に修行した5人の仲間に説かれた。これが世に言う『初転法輪』(お釈迦様の最初の説法)です。」

お釈迦様のなされた[形]を重視した南伝仏教と [考え方]を大事にした北伝仏教とがある。北伝仏教はインド、中国、韓国、日本へと伝わり、日本では多くの宗派が生まれ、その数56派と言われている。真言宗で16派、浄土真宗で10派、浄土宗で10派・・・。

最後に浄土宗10派の一つ西山派西山上人御法話[鎮勸用心]とその意識を読んで下さった。紙面の関係上、意識のみを紹介する。

[鎮勸用心]：静まる心と励む心 稲葉是邦訳

もし、一日の終わりに安らぎを覚えるならば、これは、私達が阿弥陀仏の悟りの功德に抱かれていますから。もし、朝に目を醒まし、今日の一日を積極的に暮らそうとの心がみなぎるならば、これは、阿弥陀仏の力が私達の心の中から湧き出してくる証です。しかし、現実の自分に当てはめて見ますと、このような理想的な境地が、毎日毎日続くとは思えないでしょう。でも、とてもこのような境地に立てないからといって、自分を卑下してはなりません。阿弥陀仏には、愚かな人、自分の限界を感じた人、苦しみに翻弄されている人、煩惱に苛まれている人、心が疲れ切っている人、それらのすべての人々を救おうとの慈悲心しかありません。

自分はなかなか良いことが出来ないから、仏の救いにあずかることは無理ではないのか、と言う疑いは微塵も持つ必要はありません。阿弥陀仏の救いの原理を説く[無量寿経]には、「たとえ十念でも、念仏を称える人の全てを救う阿弥陀仏が存在する」という最も肝心な文が示されているのです。

今のあなたの立場でよりいっそう励むことが出来れば、それは悦ばしいことです。あなたを見守って下さっている仏と一体となって、宗教的、倫理的実践が増進されていくことです。じっとして今は何もすることが出来なくても、それはそれで悦ばしいことです。あなたを抱きしめている仏の功德がみなぎっているのですから。

自分は善なのか悪なのか、などという自分勝手な判断にこだわってはなりません。もともと、あなたと仏の間には、強い縁があることを忘れないで下さい。ときおり、仏の救いに不信の心が湧いてくることもありましょう。でも、そのおりに、この私こそを救おうとして願いを建てた仏を信じて、念仏を称えましょう。

